

人の和で 椿十徳

本市には、古い椿が多く見受けられます。

これは、富樫政親が加賀国の守護として野々市に本拠を置いた室町時代に、ふるさとである京都を思い、京都をまねてこの地を築くために、近郊を伏見、山科、高尾と名付け、地域の整備の折に京都から移し植えた椿であると伝えられています。（「野々市町二十年の歩み」より）

世界中に数千種類を超えるといわれる椿には、白い花びらにうすく朱鷺色がかかった上品な花をつける「野々市」という本市の名称を冠した椿があります。

そして椿には、不老・公德・相互一致・謙遜・清浄・矜持・常緑不変・操節・奉仕・厚生という十の美德があり、これを「椿の十徳※」といいます。

椿がよく観賞される理由は、花と葉、枝ぶりの総合美にあるといわれています。

また、「徳」という言葉には、精神の修養によってその身に得た優れた品性、人徳などといった意味があります。

本市の歴史の上にもかかわりが深く、また、花をヒトに、葉をモノに、そして枝を知識や情報になぞらえ、これらが和となる総合的なまちづくりを進めたいという思いから、椿をまちづくりの象徴とし、この計画の計画期間である10年後の将来都市像を定めます。

生きるまち

私たちが住む野々市市は、穏やかな地形に恵まれ、活気あふれるまちに成長することができました。しかし、穏やかで活気あふれるまちであっても、大勢の人たちの知恵や力の和がなければ、地域社会は成り立ちません。すべての市民が、本市の花木である椿が持つ十の美德※と共に、人の和を尊重し、市民の知恵と力を結集することができている、10年後にはそんなまちになっていたいと思います。

この将来都市像には、「ここがいい」ではなく「ここがいい」と思えるまちづくりを、「住んでみたい」「住み続けたい」と考えてもらえるまちを、そして、「住み心地一番のまち」になってほしいという思いが込められています。

- 椿の十徳**
- ① 不老の徳
年月を経て老衰の様子を見せない
 - ② 公德を守る徳
落葉しないから木の下は汚れない
 - ③ 相互一致の徳
接ぎ木をすれば容易に合着し、互いに別個の新種を作る
 - ④ 謙遜の徳
藪陰に生えて春に花容勝絶、人は庭内に移植したいと思つ
 - ⑤ 清浄の徳
水清き土地によく生育する
 - ⑥ 矜持の徳
プライドを失なわぬ徳
 - ⑦ 常緑不変の徳
葉は常に濃緑で緑色に輝いている
 - ⑧ 操節を守る徳
霜枯れがなく、花蕾は春に備えて日毎に膨らむ営みを休まない
 - ⑨ 奉仕の徳
毎年花が咲き、栽培者の労に報いて奉仕の心を發揮する
 - ⑩ 厚生の徳
椿油は灯油や食油に用いられ、頭皮や皮膚への栄養にも適し、木材として積炭、家具、日用品などの木工素材にも適している

